

# 朝日俳壇

## 第42回 朝日俳壇賞

2025年の入選句から4人の選者が1句ずつ選びました。受賞者に賞状と記念品が贈られます。朝日歌壇賞は来週掲載します。

小林貴子 選

去来忌や俳句は今も無用の用  
(さいたま市) 佐藤勇治郎



ノーベル化学賞の北川  
進さんが「無用の用」を  
大事にしているの知り、  
この句が浮かんだ。私に  
とっては、俳句が無用の用。季語との出合  
いには、いつも感動がある。季語は生命の  
指標。これからの感受性を大切に！

〔評〕 狂子から舊門へ、そしてノーベル  
賞の北川さん引用の「無用の用」が大切。

長谷川權 選

ふるやの山にふとく雪の山  
(長野市) 縣 展子



山国の信州に暮らして  
いると、四季を通じて山  
に抱かれていく感じがせ  
られます。大自然からの  
「ささやき」も心地良く感じます。そこか  
らこの句が生まれました。これからの故郷  
の山々を詠み続けるのが楽しみです。

〔評〕 縣さんの句は長年拝見してきた。  
淡々として深い世界。精進のためものか。

大串章 選

人生を狂はす戦敗戦日  
(石川県能登町) 瀬上 裕幸



ラジオで、戦後八十年  
たった今も、無国籍とい  
うことで苦しむフィリピン  
残留日本人二世の方の  
お話を聞き、人々の人生を狂わせるのが戦  
争だと思いついた句です。地球上に、戦争  
のない時代が早く来ることを願います。

〔評〕 戦争は正に「人生を狂はす」最悪  
最大の凶器。再び戦争をしてはならない。

高山れおな 選

亀よ亀こがロコスだこで鳴け  
(大阪市) 上西左大信



自宅から近距離の四天王寺は好適の吟行地であり、散歩を兼ねてしばしば参詣している。同寺にある亀の池で、鳴くはずのない亀を眺めていたときに、インソフ寓話にある「はら吹き男」の話と重ね合わせて詠んでみた。

〔評〕 「亀鳴く」はロコス＝言葉の中だ  
けの出来事。俳句自体の暗喩でもあろう。

● 高野公彦 選

夜動明けの少女ら異国語交わしつづ笑いの  
こし通りすぎたり  
(一宮市) 園部 洋子

若き日の苦勞が、鏝も鏝六十回目の結婚記念  
日  
(東京都) 上田 国博

教科書を繰る少年の凜とみゆあまたスマホを  
みつめる車内  
(盛岡市) 山内 仁子

スーパリーの有人レジに列をなす取り残された  
人々の群れ  
(市川市) 中沢 庄平

家中のカーテン洗濯こんなにも多くの布に護  
られており  
(太田市) 川野 公子

介護ゆえ諦むること多くして心の虚を歌詠み  
て埋む  
(下野市) 若島 安子

汚れた冬冬の青空幾億の悪意を載せた電波飛  
び交う  
(五所川原市) 戸沢大 一郎

【評】 1 首目、辛い仕事を担ってくれる外国の乙女たちへの感謝の思い。2 首目、子だけでなく、若き日の苦勞も二人にとって鏝になった、というのが新鮮。3 首目、スマホをせず本を読んでいる少年が賢く見える世の中になった、という感慨。

● 永田和宏 選

☆母国とは何なのだろう日本に生まれ中国に帰  
ざるパンダ  
(さいたま市) 齋藤 紀子

一〇万年前は氷河期核のゴミ地中でゴミとな  
るまでの時間  
(中央市) 前田 良一

人里に下り駆除されるクマはみな森では負け  
組そんな気がする  
(西海市) 前田 一揆

☆スーパリーの有人レジに列をなす取り残された  
人々の群れ  
(市川市) 中沢 庄平

新品のハーケン一枚文鎮に残し譲りハンマ  
ーも添へ  
(瑞穂市) 渡部 芳郎

リーダーの横には母の鏡餅船首に父の注連飾  
りかな  
(津市) 中山 道治

頑張っている子どもたちに大人らが「頑張れ」  
と言つマラソン大会  
(観音寺市) 篠原 俊則

【評】 齋藤さん、パンダを母国に返還するというが、日本生まれのパンダの母国とはどこなのだ、と。二首目、核のゴミが単なるゴミとなるまでの気の遠くなるような時間。三、四首目、人里の熊、有人レジの列、安易に繋げてはいけないうのだが。

● 川野里子 選

☆母国とは何なのだろう日本に生まれ中国に帰  
ざるパンダ  
(さいたま市) 齋藤 紀子

しがみつき泣く子を強く抱きしめる駐屯基地  
の空砲響き  
(ひたちなか市) 安澤 美幸

lovingのeの行方を探すからきみはgiving  
のを追って  
(横浜市) 久武 和子

死んだ兄遺していった履歴書は少しのシワと  
ウソばつかに  
(町田市) 中野 功治

生きるため名乗る名前をカッコいい名前です  
ねと褒められてしまふ  
(東京都) 栗生 翠

呼びかけに応えぬ母の体内の臓器のゴトとわ  
れに応える  
(厚木市) 本庄 伸子

横浜の暮の港にロシア船ウクライナ船並んで  
居たり  
(東京都) 松本 長勝

【評】 一首目、そもそも国とは何なのだろう？ つぶらな目が問うようだ。二首目、子供には本物の戦争の恐怖だ。三首目、子供っぽい一時的なloving、givingではなく大人のlove、giveが欲しい。六首目、聴診器の音か。臓器は生きている。

● 佐佐木幸綱 選

日常の景色となりぬ幼な児が乳母車に乗りス  
マホ見ている  
(八王子市) 井上 紀子

笛持って登校班の後を追うこんなことに熊  
が出るのか  
(宇治市) 小堀 裕子

口数の減った息子の凄まじき口のはたらき夕  
鮎に眺む  
(横浜市) 富尾 大地

病床で地図帳広げ旅に出る会うことなき人  
の住む街  
(洲本市) 松下 利明

好きだった料理もできなくなった母目的もな  
くキャベツを刻む  
(市川市) 末長 正義

十年後の自分に宛てて書く手紙これも広義の  
遺書なのだろう  
(東京都) たむらおきた

育児とは例えば朝に水筒を洗って夜にまた洗  
うこと  
(熊本市) 貴田 雄介

【評】 第一首、スマホを見ながら乳母車に乗っている子供。「日常」という語を効果的に使って成功。第二首、上句、簡潔でうまい。保護者も忙しい昨今である。第三首、すさまじい食欲で夕食をかき込む息子。彼の迫力が読める。